

豊橋市安海（やすみ）熊野神社蔵 牧野新作（眞三九・方叔）関係伝書  
翻刻と解題 [二]

*Kyogen Dorama Scripts Transcribed by Shinsaku Makino and Possessed by Yasumi Kumano Jinja in Toyohashi, with Reprint and Bibliographical Introduction*

米田真理（朝日大学 日本語研究室）

Mari YONEDA

*Department of Japanese, Asahi University*

本紀要第44号（二〇一九年度）に引き続き、牧野本の翻刻を掲載する。今回は「No.101葺」「No.57-1大般若」「No.57-2千切木」「No.57-3口真似」「No.57-4宝笠」の五番および《千切木》に混入している《釣狐》の一部と小歌を取り上げる。いずれの曲についても、牧野本のおおよその性格を示すため、翻刻の前に書誌や他本との比較に関するコメントを付した。

〔謝辞〕本稿を成すにあたり、魚町能楽保存会をはじめ、東海能楽研究会のみなさまからご協力を賜りました。なお、本研究はJSPS科研費「P17K02431」の助成を受けたものです。記して深

謝申し上げます。

〔凡例〕

- 漢字の字体を通行のものに改めた。
- 原文の改行は無視したが、場面の区切り等、意味のある改行については再現した。
- 原文には句読点はないが、詞章の区切り等に一字分の空白を置いた。
- 本文中に抹消・訂正のある場合、

原文が抹消・訂正されている場合は抹消線を施し訂正後の本文を「」に入れて示した。ただし、単純な書き損じの場合は抹消・訂正は無視した。  
 抹消せずに別の本文が併記される場合は傍線を付して、訂正後の本文を「」に入れて示した。

[No. 101 茸]

共紙表紙。縦248mm×横161mm。外題(中央に墨で直書)「茸 六儀」。署名(表紙左下)「牧野新作」。表紙と一丁表に後の所蔵者を示す「豊橋市/2. 6. 14/夏目書店」の丸印が押される。裏表紙に墨書で牧野新作の花押あり。本文中、役名や合点、節付は朱書される。

米 田 真 理

《茸》に関する和泉流諸台本の比較と分析については、小谷成子・野崎典子「『和泉流秘書』(愛知県立大学附属図書館蔵) 翻刻・解題十二(終)」(『愛知県立大学日本文化学部論集』第二巻。二〇一一年)が詳しい。

特に各台本における主題の違いについては、

和泉流五台本のうち茸を嫌がるものが『天理本』『波形本』『雲形本』の三本、茸の生えることを喜ぶものが、『和泉流秘書』『型付本』の二本であった。この二本は、従来の茸を嫌がるものを逆に喜ばしいものに趣向を変えておもしろみを工夫し

たのであるが、従来のものも替りの仕様として残したのである。とまとめられている。このうち『型付本』は、

『雲形本』の元業以前の家元山脇の誰かが、自分の考えにより工夫をこらして試みた狂言台本

とのことであるが、同様に『雲形本』系統の台本である古典文庫本も、茸を迷惑なものとして扱っている。

さて、牧野本の本文は『波形本』と同じであるが、結末部、山伏とアドのやりとりのみを欠く。すなわちアドが「毎年此やうに出ますれハ重宝でござる ちとお山伏へも上ませう」と言つて山伏も歓迎する場面である。その結果、祝言性と、気味悪さと、いづれを前面に出すか判然とせず、やや特殊な性格の台本になっている。

安海熊野神社蔵の台本の中では、No.16無署名本とNo.131の大木惣助本も牧野本と同じ本文である。したがって、牧野本は魚町での上演台本として標準的なものであったと考えられるが、上演のつどキノコの種類や性格を工夫することができる、柔軟性のある台本と言える。

茸

アト／＼是は此辺の者で御座る 此間某の房へ夥敷い茸がはゆる取のけく／＼致せども 一夜の内に又元の様ニはゆる あまりふし義な事で御座るによつて 爰ニ御目かけらる、御山伏が御座る是へ参り御頼み申 良事か悪事か見てもらをふと存 シカ／＼誠

ニふし義な事で御座マツ 去ながら某が参り御頼み申たぞならば御目  
 かけらる、御山伏で御座るに仍マツテ お出なされて被下ぬと申事は  
 御座るまいと存 イヤ何角といふ内に是じや 物も御案内申  
シテくしきの窓の間へ 重畳のゆかの辺りにゆがのほマツふマツふ水  
 をた、へ 三みつの月を済所に 案内申さんとはたたぞ マツ マツ  
 私で御座り升 シテイヤ爰な者ハ「マツ者マツ」を朱で「マツ」に換え、さらに助詞「マツ  
マツ付加」足本から鳥の立様に物をいふ人じや して今日何んと思  
 て御出やつた マツイヤチト御頼み申たい事か御座つて参りま  
 した シテ夫はいかよふな事じや マツ其事で御座り升る 此  
 間私が房へ夥敷茸がはへ升 取のけく致せども 一夜の中二又  
 元のよふにはへ升 あまりふしぎな事で御座るに仍マツ 良事か悪  
 事かこなた御出なされて被下たらバ 忝のふ存升 シテ扱々夫  
 ハふし義な事じや 此間別業の子細有つて何方へも行かねども  
 そなたの事じや仍マツ 行もやるふか マツそれは忝のふ存升  
シテ案内の為に先へ御行きやれ マツ御案内為に御先へ参り升  
シテヲ、く マツ扱今日御出なられて被下て忝のふ存升  
シテ先は合点の行ぬ事じや 去ながら某が行一目見たぞなら  
 ば良事か悪い事かよふすが知る、て有ふ マツイヤ何角といふ  
 内早是で御座り升 こふ御通り被存ましよう シテ心得た 扱  
 彼茸ハどれに有ぞ マツ是で御座り升 シテハア、 大きな茸  
 じやのふ マツ左様で御座り升 シテハテ合点の行ぬ事じや先  
 加持をして良事か悪事見ふ程二とくと聞しませ マツ心得まし  
 た シテフ、先山伏と一つば山に起キ伏二仍マツテ山伏也 何んと

聞えた事ではないか マツいか様尤そふな事で御座り升 シテ  
 頭巾と一つば布切壹尺斗りを真黒二染むさとひだを取 頭二チヨ  
 ンといたゞくに仍マツテ頭巾也 マツハアン シテいらたかの数珠  
 てはのふてむさとしたる木切れつなきあつめ明王のさつくに掛て  
 いのるならばなどかきとくのなかるらんマツほんマツく マツ又夫  
 へ出ました シテ是ハ如何事 是りや何んじや れいしじや  
マツとはどふした事で御座り升 シテれいといふ物は聖人の御  
 代ならては出茸でおりやる 是富貴の相でをりるそや マツ夫ハ忝  
 のふ存升 シテいよく木の子のふゆるやふに此度は茄子ナスのい  
 ん結掛けいのつてやろふ マツ夫忝のふ存升 シテフ、茄子の  
 いんむすび掛け今一ト祈りたるならばなどか木子のふへさん  
 ほ、ふるんマツく マツハア又出ました シテ是りや何んじや し  
 めじや マツハアよい匂が致し升 シテいよく富貴二成やふ  
 に此度はふきのいんのむすび掛いのつてやろふ マツ夫は重々  
 有かとふ存升 シテフ、ふきのいんの結掛いろはにほとんと  
 祈るならば何とかちりぬるをはかなり ほ、ふるんマツく マツハア  
 又出ました 是ハ如何事ほ、ふるんマツく マツ是ハ夥敷茸じや シテ  
 ぼ、ふるんマツく

## 〔No. 57〕

白茶色表紙横型。縦149mm×横188mm。表紙左隅に題箋が  
 あり「狂言／外二小歌／第八号」と墨書。題箋の外上部に「大」、

左側に「他見不免」と朱書。裏表紙見返しに朱筆の奥書があり「明治十九年之写／満喜能／方叔（花押）」。「狂言十三曲」と《釣狐》の一部、小歌を収める。

筆跡は同一人物のものだと判断できるが、筆勢や朱の用い方、合点の形状は統一されていない。

・《大般若》「シテ」「アト」等の役名は朱、合点は朱で山がなく斜線のような形状。本曲だけが小ぶりの細字で字間が広いため、一見、他と別筆のようだが、ひらがなの「つ」のように丸みのある文字の膨らみが大きく墨が濃くなる点など、牧野新作筆の特徴が認められる。書き損じがなく割注も朱で丁寧に記されることから、清書として記されたものと推測できる。

理 真 田 米

・《千切木・小うた・宝笠・六地藏・蚊相撲・籠太鼓間・仁王・歌仙》役名、割注は墨。合点も墨で山がなく斜線のような形状。筆勢が強くやや乱雑で、加筆や修正も見られる。

・《口真似・八幡前》役名、割注は朱。合点は墨で山がなく斜線のような形状。

・《連箸・牛馬》役名、割注は朱。合点も朱で山がなく斜線のような形状。

・《懐中髻》役名、割注は墨。合点も墨で「へ」様の山がある。以上から本冊は最初から一貫した編集目的のもとに書写されたのではなく、ある時期に牧野新作が自筆の台本を一括して目次と奥書を付したものと考えられる。

注目されるのは、本稿で取り上げた《千切木》《口真似》《宝笠》

に『波形本』と同文の台本が見られる点である。次号で取り上げる《連箸》《牛馬》では装束付や図も『波形本』と同じであり、『波形本』の書写本の拡がりという意味でも興味深い。

〔目次〕 大般若 / 千切木 / 口真似 / 宝笠 /

連箸 / 牛馬 / 懐中髻 / 八幡前 / 六地藏 /  
蚊相撲 / 歌仙 / 籠太鼓 間 / 仁王

#### 〔No. 57-1 大般若〕

十二行、罫線無。役名と、合点はすべて朱筆。本稿ではそれ以外の朱筆は本文の頭に（朱）と記し、続きの本文で墨筆に変わる箇所（墨）と記して示した。本文中、神子が神楽を舞う場面「めでたやナ（神楽）」の丸括弧は原資料にある。

《大般若》は和泉流だけにある曲で、同じ家で鉢合わせした僧（大般若経を読む）と巫女（神楽を舞う）が、それぞれを邪魔に思っているがみあう。巫女が神楽を舞ううちに僧の態度に変化が生じるが、その演出については、羽田昶「楽」（神楽）「羯鼓」のある狂言―狂言の囃子事その二―（『芸能の科学』第23号、一九九五年）に指摘がある。まず僧が巫女にどのような態度をとったのかは諸台本の多くが「口伝」として記さず、現行演出でもあいまになつている。また結末については、古い台本である『天理本』や『和泉流古本』、さらに江戸時代後期の『狂言大成』<sup>（集英社）</sup>「三百

番集』などは舞台上でのシヤギリ止めであるが、現行演出では巫女が僧を追い込む形である。

さて、牧野本は「神楽」の前まで『波形本』と型付・せりふとも同じ本文であるが、「神楽」から後の僧の型が記されなかったため、僧の「是々今の事を必ス心に懸けておくりやるな 是々」というせりふの「今の事」がどのような内容かがわからない。『波形本』では、それが「神楽」の途中で僧が神子にちよつかいを出す行為であることが知られるが、牧野本では省略されている。反面、牧野本には『波形本』にはない「神楽」の型付や、笛の譜が詳細に記される。

安海熊野神社蔵台本の中に《大般若》はこの他No.17-5無署名本がある。型付は記さずせりふのみだが、No.57-1と比較すると四箇所を除いて同じせりふで、その四点のうち三点は『波形本』と一致する。つまり、No.57が誤って書写した箇所が、No.17では正しく記されているということになる。ただし、結末の「己レ、さいぜんなどやこふふて今さら何事じや エ、腹立や〜 追込ミ」(No.57)を欠いており、この部分が「口伝」であることと関係があると思われる。

### 大般若

(朱) 名乗當通 シテ 当庵の住寺で御さる いつも正五九月にハ御祈  
 持二まいる方か御さる 則チ参る様にと申て見へた 唯只から参  
 ふと存 (朱) シカク 誠二ありがたい事て御さる さして旦那多

ふも御さらねども あなたこなたより御祈禱を頼る、に依て 毎日 〳〵 隙のない事て御さる 是じや 物も案内申 アト 表二案内かある 案内とハ誰そ シテ 愚僧て御さる アト エイ御住寺様 是能ふこそ御出被成れました シテ 昨日ハ御人を被下ても能ふ御さるに御自身の御出忝ふ御さる アト 是ハ御念の入た御あいさつで御さり升ル 〳〵 いつも乍早々の御帰御残り多い事て御さる 〳〵 先こふ御通り被成ましよふ 〳〵 心得ました (朱) 下二居テ  
 シテ 誠二加様に御祈禱を被成事ハ 我人望所なれ共左右ハ得致さぬに 是ト申も御家か富貴故て御さる 〳〵 忝のふ存し升ル 夫レにしハらく御休被成ましよふ (朱) 正面開テ 〳〵 ア、〳〵、  
 神子 〳〵 わらハは神子で御さる いつも正五九月にハ晦日払に参る御方が御さる 参ろふと思升 (朱) シカク 〳〵 誠二正五九月と申月八日出度月で御さるに依テ方 〳〵 へ参る二よつていそかしい事じや 是じや 物申御案内申 (朱) 一ノ松ニテ案内乞  
 〳〵 又表二案内か有ル 案内とは誰そ 〳〵 わらわで御さる 〳〵 是ハ能ふこそ御出やつた 〳〵 いつもの通り晦日払二参りました 〳〵 やれ 〳〵 夫レハ能ふこそ出さしました 夫レならば神楽を始めておくりやれ 〳〵 心得ました (朱) 通り后見座へ 〳〵 大般若を御始メ被成て被下ましよふ シテ 心得た  
 (朱) 大小前ニテ 神 〳〵 おふはるかなる沖にも石の有物 〳〵 比須のこぜの腰懸ケ石 タツ出 〳〵 大般若はらみたニヨロ 〳〵 のふ 〳〵 御亭主 神楽がかしましゆふて大般若か読まれませぬ程に神楽をやめよと云ふて被下 〳〵 心得ました 〳〵 のふ 〳〵 神楽かかしまし

57 方で大般若か読まれぬとおしやる程ニ神楽をやめさしませ

／是ハおかしい事を仰らる、そなたが祈祷なればわらハかのも  
祈祷で御ざる かまわずともめい／さばきに召レと云て被下

／心得た 其通り云ふ 其の限りの事を云ます 忝も大

般若ハ日本第一の名経なれハ是を讀じゆ申てこそ御祈祷にも成り  
ますれ 神子などの分として某のそばへもよる事ハ思も依らぬ事  
て御ざる 早々いなさせられい 心得ました のふ／今

を聞せられたか ヤアラ無理ノ事を云ふ人で御ざる 仏在世の  
時よりも一切経ハ皆衆生を再渡せんか為メの事で御ざる 是ハ又

理 神祇が今生の御祈祷なれハ神楽程の御祈祷ハ御さらぬ そつとも  
そちへかまふ事ハ御さらぬと云ふて被下 其通り云ふ 其のな

真 田 左様でハ御さらぬか 兎角かまわせらるれハ同じ様で気の毒  
ニ存じ升ル あの様なものにハかまわせられぬが能フ御ざり升ル  
米 如何様ハヤそふ云わせらるれバ尤もで御ざる 夫レならバ

かまいますまい 左右あらハ大般若を御始メ被成被下ましよふ  
／心得ました 神楽を始めておくりやれ 心得まし

た あらめでたやナ 只今の御神楽のかんのふに依 夜の驚  
キなく昼のさわぎ無く 何事も思所望を叶へ給ふ めてたやナ  
（神楽） 是々今の事を必ス心に懸けておくりやるな 是々

／、あのいたづらものめ 免して呉い 己レさいぜ  
んなどやこふ云ふて今さら何事じや 腹立やく 追込

神楽舞仕方

(朱) 初神楽 (墨) 左脇座へ行き夫レヨリ 右目付柱ノ処へ行き少しくり  
てまわり 右廻り中廻り小廻りにて鈴をフリ終

(朱) 后 (墨) 左脇座へ行き夫レヨリ 右へ取り目付柱の処へ行き笛の  
頭を聞 (右左と四回足拍子を繰り返す図) 夫ヨリ右へ少しくり廻り 脇座

の処より角ヲ取りケン 二テシテ柱ノきわ迄行き笛の切ニ成ル  
処ニテ (右左と足拍子二回の図) 拍子フミ小廻りにて又笛の頭を聞き

(右左と足拍子を六回繰り返し最後に左で二連続で踏む図) 拍子ふミケン 二テ  
脇座へ向キ正面中程ヨリ目付柱へケン 廻りニテ行き 笛のしま

いぎわ成ルとき (右左と足拍子二回の図) ト拍子ふミ 右へ少しくり  
大廻り中小廻り 正面より先へ出笛しまい成時 (右左右左右と足拍

子の図) シヤキリ左右へ鈴扇トモふり込ミ エ、トカ、ル  
森田流ノ笛

ヤリト○ヤリ○ヤリト○ロロロ○リツ○リツ○ラララ○トルラル  
ラルラ○

藤田流 笛  
ト・ライトラ○ヤリヤラ○ヤリヤラ○オヤライトラ ○オヤライト  
トルロ○トルロロロ○リツリツララ○ヤリヤララ

目付柱  
(以下、図1)

(朱) シテ 無地熨目 長衣 角頭巾 念珠 経持 末広サス

(朱) 神子 緋又箔 色目手ノ箔着ルヘシ 白水衣 カツラ 鈴  
扇指ス

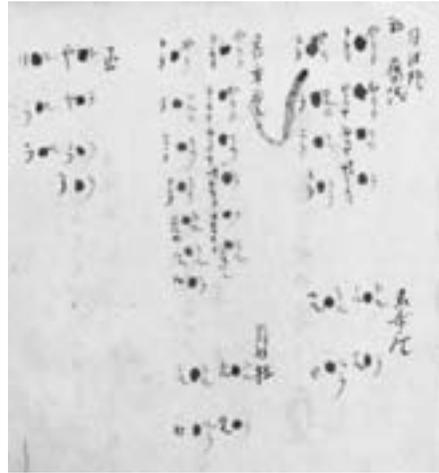
(朱) アト 熨目 長上下 扇持 常ノ通り

〔朱〕 仕方様々有ト雖トモ書クコト不能 依テ口伝

〔墨〕 三番叟仕方

〔本文ナシ〕

〔図 1〕



〔No.57―2千切木〕

行数不定（13〜15行）、罫線無。役名、合点、本文ともすべて墨筆。途中に同じ筆跡で《釣狐》の一部が混入し、その丁の裏から再び《千切木》が始まる。

台本には台詞のみを記し、役者の所作に関する記事はない。台詞は『波形本』と同文であるが、末尾の装束付は記さない。誤記が散見し、例えば『波形本』では「趣向<sup>シユカウ</sup>」とする箇所を「発句<sup>セウコウ</sup>が」、「おのれにくいやつの」を「おのれにくやつ<sup>シユカウ</sup>の」、「お、うわらわも跡から行<sup>シユカウ</sup>」を「お、わらわもあから行<sup>シユカウ</sup>」とする。一丁あたりの行取りが不定で、字配りも他曲に比べて乱雑である。

安海熊野神社蔵台本のうちもう一本の《千切木》であるNo.4―4無署名本は型付や装束付を含んだ『波形本』の忠実な書写本で、

字配りも丁寧である。前掲の異同については「趣向<sup>シユカウ</sup>」、「お、うわらわも跡から行<sup>シユカウ</sup>」は『波形本』と同じだが、「おのれにくやつ<sup>シユカウ</sup>の」はNo.57と同様で、魚町写本のもとになった『波形本』（狂言共同社蔵『波形本』ではなく書写本）の原型が窺われる。本稿では参考としてNo.4の型付と装束付を補記した。

#### 千切木

是ハ此あたりゆ「者」テ御座る 某初心講をむすんで連歌を致ス  
今日ハ頭<sup>トウ</sup>に当て御座る 太郎官者ヲよひ出し各々へ申遣ふと存  
ル<sup>(1)</sup> 汝ハ各々の方へ行 何レモ御さそいなされて御出なされ  
て被下ルように申テこい 〳〵かしまつて御座る<sup>(2)</sup> 〳〵やれ  
〳〵今日<sup>(3)</sup>はたのふだ者が頭<sup>トウ</sup>ニ当ラれたとあつに扱<sup>ツマ</sup>となたから先へ  
行ふそ ヤ いつも誰殿方へみなよらせらる 是へ参らふと存ル  
〳〵<sup>(3)</sup>  
〳〵おもて二案内が有 案内トは誰ぞ 〳〵私て御座り升ル  
〳〵エイ太郎官者来たか 〳〵たのふ者<sup>ツマ</sup>申されます となたも都合  
されてお出なされて下さるやうにと申こされました 〳〵成程心得  
た 幸いつれも是へよつて御座る 追付おとも申て行ふ程にそち  
ハ先へ行 〳〵左様に御座らハお先へまいります<sup>(4)</sup> 〳〵ハ誰殿  
へまいりましたれバ いつれミなあれへ寄て御座ります 追付  
お出なされうとのお事て御座り升ル 〳〵見へたらハ此方へいへ  
〳〵かしまつて御座る<sup>(5)</sup> 〳〵いづれも御座るか 〳〵是におり升  
る 〳〵只今誰殿より人がまいりました いざまいりますまいか

一段とよふ御座らふ 〳〵さあ〳〵こざれ<sup>(6)</sup> 〳〵太郎官者来たぞ 〳〵是ハお出なされましたか 申いづれも様御出で御座り升る 〳〵かふお通なされといへ<sup>(7)</sup> 〳〵今日ハ忝のふ存まする 〳〵今日ハ目出度御座る 〳〵おやかましう御座ろふ<sup>(8)</sup> 〳〵やれ〳〵いづれもよふこそ出させられた 先こう通らせられい 〳〵心得ました 〳〵扱いつも太郎がまいつてじやまニ成まする程ニ 今日ハ奥の座敷で致さふと存て之事で御座る さあ〳〵いづれもこふ通らせられい 〳〵是ハ一段とよふ御座ろふ<sup>(9)</sup> 〳〵扱いづれも御発句ハこざらぬか 〳〵いや発句も御座らぬ 御亭主の御発句ハ御座らぬか 〳〵客発句に亭主脇と申によつていづれもの内で御発句をなされて下され 〳〵夫ならばこなた被成 〳〵とか〳〵かれこれ申さうよりいづれも惣あんじに致て出がちに致さふ 〳〵是がよふ御座ろふ 〳〵いづれもあんじさせられい<sup>(10)</sup>

米 田 眞 理

申者〳〵是ハ此あたりに住居致ス太郎ト申者で御座る 爰にたれと申者が御座るが 今日ハ連歌の頭に当た 某の方へハ人をもおこさず 其上某がまいつてハじやまになると申て 奥の座敷でひそかにいたすと申ス 猶々まいろふと存ル<sup>(11)</sup> 〳〵木ウまな<sup>シテホ</sup> ウ是ハミな揃てお出やつ のんと発句ハ出たか ハ、ア天神の懸物をかけたハ さても〳〵ゆがふだり〳〵 世に三寸の見直しといふ事が有か 是ハ三尺もゆがふたハ<sup>(12)</sup> 〳〵太郎〳〵<sup>シテナ</sup> んじや<sup>(13)</sup> 〳〵ちよつと是へ来さしませ<sup>シテ</sup> 〳〵何事じや<sup>(14)</sup> 〳〵そなたがござつてハ殊外連歌のじやまに成と仰らるゝ程に勝手へ来ていさしませ 料理が出来たら知らせふぞ<sup>シテ</sup> いや爰なやつ

が すいさんなひつこんでいよふ 身共ハ連歌をしにこそ来たれ 料理くひニこぬいやい<sup>(15)</sup> 身共がおらいで此連歌かなる物か ハア硯<sup>(16)</sup> 〳〵文台の置やう此やうな事もしらぬならハおれに習ふたがよい 笑ハ、ア水仙の花さても〳〵生たり〳〵 此やうな事をせようより わらでくすんでほうりこふで置たがよい なんとミな発句ハ出たか 身共がよふな上手の前でハ出ぬ物じや さてどう成とも発句が出たらハ先いうたがよい 身共が直してやろふ<sup>(17)</sup> 〳〵太郎〳〵<sup>シテ</sup> 〳〵なんじや 〳〵ちよつと来さしませ<sup>シテ</sup> 用ハ有まい はて先来ましませ 〳〵何事じや そなたいてハ殊外連歌のじやまに成程ニ こちへはいつていさしませ<sup>シテ</sup> ヤ誰<sup>「唯」と書きかけて上から言偏に直す</sup> そなたハ今夜連歌をするニ 身共の方へハ人をもおくせぬ 惣じてそなたハ人ゑらみをめさるといふて いかう人がしかるぞや ちとおたしなミヤレ 〳〵さてじやまに成といふにこちへはいていよ<sup>(18)</sup> 〳〵はてさて身共がい、で連歌が成物か<sup>(19)</sup> 〳〵一段とよふござろふ<sup>シテ</sup> 身共がい、で連歌が成物か<sup>(20)</sup> ヤイ太郎<sup>シテナ</sup> なんじや 〳〵そちがいてハしやまニ成といふ おのれ行ぬと目に物を見するそよ<sup>シテ</sup> 〳〵目に物を見するといふてなんとする 〳〵おのれにくやつ<sup>(21)</sup> の ミなよつてふませられい<sup>(22)</sup> 〳〵おのれ覚へたか〳〵<sup>(22)</sup>

〔No. 57 1 2 付 釣狐〕

釣狐 釣人  
表ニ案内がある 案内とハ誰ぞ エイ□兵衛様<sup>(雜談)</sup> こなたならはい

つもの通り案内なしにお通り被成で 是暮二及ふて何んと御思召  
ての御出て御ざる

夫ハ心元ない如何ナ事で御ざる ハア是ハ

〔No.57-2千切木 続き〕

シテア、ゆるして下されく 命ハたすけて下され<sup>(23)</sup> 女のふは  
ら立やく なんじやワ男が連歌の場でふまれた 夫ハ誠か  
エ、腹立やく どれ二いるしらぬ されハこそ是ハ先なんとし  
たぞいやい<sup>(24)</sup> シテ重てハまいるますまい 命をおたすけなされ  
て下されませう<sup>(25)</sup> 女、是ハいかな事 ワらわじやわいやい  
く<sup>(26)</sup> シテ女共か 女お、さて シテそなたハなんとして来た  
女そちか連歌の場でふまれたと聞たによつて身もせもあられいて  
来たわいやい<sup>(27)</sup> シテイヤ身共ハふまれハせぬ 女エ、ふまれぬ  
物が此やうに土が付てある物かくいやい シテイヤ是ハ物じや  
女なんと シテミな衆がそちハいままた定る紋がないそふな 紋を  
付てやろふといふて 紋を付けておくりやつた 女エ、腹の立  
足あとの紋が有物か いやい<sup>(28)</sup> シテイヤ人の紋とさし合ハいで  
よかるふとて 女またぬかすか ふまれて男が立物か くか いや  
い シテはて立ぬなら立ぬまでよ 女また其つれをいふ打はたせい  
やい<sup>(29)</sup> シテ打はたせ 女お、さて シテはたせハ命がないぞよ  
女エ、もとかしい 是ニ此刀をさいて此棒を持って打はたしてこ  
い<sup>(27)</sup> シテむかしから女のわ、敷ハ夫の命を取ルトいふがそ  
ちが事じや なんと身共が替りニそちはたしてくれぬか 女エ、

腹の立 男有ながらいつの習<sup>ナラ</sup>に女がはたしに行者が有ふ はたし  
てこねハ内へとてハよせぬぞ シテなんじや 内ハハよせぬ 女  
お、さて シテ夫なればバ行ふがそなたも来てくれるか 女お、ワラ  
わもあから行<sup>マツ</sup> シテ夫ならハ行ふ いつれ是ハかんにんのならぬ  
事てハない<sup>(28)</sup> 女たれくがふんだぞ シテいつもの人数じや 女  
とふ人ハたれて有た シテとふ人ハ誰で有たあれへ行ふ 女早ふ行  
く<sup>(29)</sup> シテエ、物申 女エ、物申所か ふん<sup>マツ</sup>こんではたせいや  
い<sup>(29)</sup> シテはて其よふにいわずとも そなたハツツトのいてい  
さしませ<sup>(30)</sup> 物申 誰との御宿ニ御座るか<sup>(31)</sup> 主留す シテヤ  
イく留すじやといやイ 女なんじやるすじや シテヤイ留すなら  
ハ是へ出おれ 出る所を此棒でミけんをほふどぶつて<sup>(32)</sup> お取  
直してよハ腰をないで<sup>(33)</sup> こける所を飛上ツて式十も三十もふ  
んで<sup>(34)</sup> く ふみころしてやろふそいやイ 女ヲ、でかさし  
ました 是から誰で有たぞ シテ是からハ誰じや 女さあく早ふ  
行いやい シテいやきやつハ日頃心のよい者じやか今夜ハ何とお  
もふたやら した、かふみおつたハやい<sup>(35)</sup> 女扱々にくいやつ  
じや シテサアく爰<sup>コ</sup>じや<sup>(36)</sup> 女爰ならハふん<sup>マツ</sup>こんではたせいや  
い<sup>(37)</sup> シテはてさてせわしい 先身共次第二しておけいやい<sup>(37)</sup> 物  
申 誰様ハお宿ニ御座りまするか 女エ、様といふ事が有物か  
めといへいやい<sup>(38)</sup> シテ誰殿めお宿ニ御座り升ルか 立頭留す  
シテ又るすじやといふわいやイ 女なんじや留すじや シテヤイ留  
すならハ是へ出おれ 出る所を此棒でこう打こかしておいて<sup>(38)</sup> 腰  
の刀をするりとぬき<sup>(39)</sup> 両の手を打おとし手も足もない物ニし

てやるふぞいヤイ 女ヤイ ワ男留すな所へ行ず共内ニいる所へ  
ゆけいやい シテもはや誰もない 女イヤく大勢じやあつたけな

早ふ行ケく シテイヤまた誰が有た 女夫々早ふ行いヤイ

シテイヤあれハ(40) ことの外たんき者じや二よつてりやうじにハ  
行れぬ 女エ、打はたすに其やふな事がある物か わらハがあと

ニ付ている程ニ きをはつたりと持テはたせ シテ心へた サア

く爰じや(41) 女早ふよび出せいやい シテはてさて大きいこへ

をするな 物申誰様ハ(42) 女はいかな事 様所かめといへい

ヤイく シテはてさて夫ハがてんなれ共 男ハじぎにあまれじ

やわいヤイ 女エ、また其やふな事をいふか シテはて其やふな事

をいふか シテはて其やう二大きいこへをすれハ出るとわな

だまらしませ 女其出る所をうちはたせいやい シテ其やふニゆう

ならハそなた行 女エ、もとかしいヤイ(43) 誰ハ内ニいるか(44)

米 立衆留す 女又留すじやわいはい シテなんじや留すじや 留す

ならハこちへおこさせませ(45) ヤイ おのれ是へ出て見おれ

出る所を此棒でむな板をほうどついで(46) つきこかしておいて

足を持テ「持テ」引てく(47) 引すりころしてやるふぞいヤ

イ 女のふく出来さしました みな内ニ居れども そなたのい

きおいニおそれて出ぬ物でかな有ふ 此上ハきん所へも聞へるや

うに いざ和歌を上てかへらせられい シテ是ハ一段とよかるふ

女さあくうたわせられい シテ心得た シテ爰をとへとも留

すといふ 女かしをとへとも留すといふ 二人是かや(48) こと

のたとへにも いさかいすきてのちぎり木とハく かゝる(49)

事をや申らん 向へ出 二人ゑいくおう 女のふくいとしい人  
ちや つとござれく(50) シテ心得たく

【参考 No.4 型付・装束付】

(1) 太郎ヨビ出ス事常ノごとく (2) 言付常ノごとく (3) 太郎ト

衆やへ向イ案内ニテ立頭衆屋ヨリ出ル (4) ト主ノ前へ行ツクバイ

(5) ト云内ニ立頭 衆やへ向イ立衆ヨビ出ス (6) 心得ましたと立

頭同道シテ舞台へ入ル (7) 其通言 内ニミナトヨリ (8) トシテ柱

ノ先へミナ立ナラフ 主出ムカイ (9) トミナ下ニナラフ 主ハ上、立

衆ハミナシテ柱ノ先へナラフ (10) トミナ首カタゲテアンヅル 其内ニ

シテ一ノ松ニテ名乗 (11) ト舞台ノ真中へ行 大ヒザカキ下ニ居テ

(12) ト云内ニ 主 太郎冠者ニ目クバセス 太郎冠者立テ一ノ松ヨリ手

ヲタ、キヨブ (13) ト言テ来ル (14) ト来ル (15) トシカリツケ

又舞台へ入ナガラ (16) 又モトノ所へ行 (17) ト言内ニ 主 一ノ松

へ立 (18) トツカマエテ一ノ松へ引スエ 主ハ舞台へ行 (19) ト言ナ

ガラ又舞台へ行 其内ニ (20) モトノ所へ行ト 立頭立テ (21) 立

心得ましたトフム (22) トシテヲ真中ニ入 上向へクルリトマキマハシ

足ヒヤウシフミ 其内ニシテノカミサバク (23) トフシテラル 立衆亭

主モミナ大小ノ前ニナラビ下ニイル (24) ト一ノ松ニテ名乗 舞台へ入

シテノフシテイルヲ見テ引ヲコス (25) トナキナヨリハビル (26)

ト引ヲコス (27) ト刀ヲサ、セ棒ヲモタス (28) ト片ハダヌグ

(29) トツキヤル (30) 女ハヒラキイル 女早ふはたせ (31) トヲソ

ロシサウニ言 (32) ト打仕廻 (33) 同仕廻 (34) フム仕廻 (35)

ト言ナカラマハリ (36) トワキ座へニゲル (37) トシテ柱ノ先ニテ

(38) トタ、クマネ (39) スクマネ (40) ト言ナガラ廻ル (41) ト  
又コハガル (42) ト大小ノ前ニテ云 (43) ト棒ヲ引タクリ (44) 其  
シテハ一ノ松ヘ行 聞イル (45) ト女ノ棒ヲ引タクリ (46) トツク仕  
廻 (47) 一足に跡引ナガラ飛仕廻 (48) シテ斗 棒ニテサシ廻シモド  
ル (49) サユウトメ (50) ヒナンニテ顔ヲフキ

## 装束

主 長上下

立衆 同

太郎官者 狂言上下

シテ 懸素袍 狂言袴下斗 タ、カレ髪サバク 片ハダヌグ  
女 箔帯 脇指左ニサシ出ル 棒持ツ 片ハダヌグ

## 〔No. 57-2 付 小うた〕

小うた

いつまでくさのいつまでも かわらぬ友こそ。かいへたるいち  
のたからなれ〜

一二三四五六七八。九こそんとハマふせとも。十までハきこし  
めされよ

ありかたの御事や〜。あらありかたの御事や。われらごとき  
者までも。みな重おんにほこつて。栄かへる家こそ久しける

さん〜くどもすぎぬれバ。のちハ酒きやふのあまりにや。む  
こもしふともろ共〜。あいまいまふてぞいらいける

〜請られ申す神心。けにしんあれば徳ありや。ありかたしありが  
たき。つけそ目出度かりける。

## 〔No. 57-3 口真似〕

13行、野線無。役名、合点、本文ともすべて墨筆。

二分分ち書きで示される役者の所作や、末尾の装束付も含め  
『波形本』と同文だが、異なる点も二つ見られる。

一つは、『波形本』が「キヤク」と記す役名を「アト（＝アド）」  
としている点である。もう一つは、序盤、太郎冠者が客の家を訪  
ね案内を請う場面で、『波形本』が

イヤ何かと云内にはしや 物申お案内申ゴトツネキヤク／なん  
とおもふておもふてお出やつた 太郎／たのふた者からお使  
にまいりました

と記すところを、牧野本では

イヤ何かといふ内二是しや 物申案内申常アト／イヤ表  
に案内が有 案内トハたそ 太／ハア私シテ御座り升ル アト

〜エイ太郎冠者殿なんと思ふてお出やつた 太／たのふた者  
からお使にまいりました

のように傍線部が増補され、『波形本』の誤記も牧野本では改め  
られている。これらの補筆や訂正について、牧野新作が行ったの  
か、それとも牧野新作が写した『波形本』（狂言共同社蔵『波形本』  
ではなく書写本）の段階で既にあったものかは判断できない。

現存する安海熊野神社蔵台本の中で『口真似』はこの一本だけ

51 であり、この曲が魚町でどのように享受されていたか、上演記録と併せて考える必要がある。

## 口真似

主 是ハ此当りの者て御座る 今日夕去ル方ヨリ珍ら敷酒肴ヲもふした 某シひとりたふるも興も無 たそよい相手がほし事て御座る 先太郎官者ヲよひ出し談合いたさふト存太郎呼出テ普通通り 太 夫ハよい御相手かお座り升る 主 となたしや 太 私シ 主 さてくうつけた事ヲいふ そちかよふな者を相手にしてのふてなんの面白イ事か有ふ どなたぞお供申てこい 太 畏て御座る 主 ちとこのミが有 太 いかやふのお好ミて御座る 主 多もない御酒しやに依てまいりそふでまいらいて 又まいりそむなふておもしろふあがるお方を御供申てこい 太 六ヶ敷お好ミて御座る 米 畏て御座る 主 いそいでいてやかてもとれト云付是モ同シ事 太 扱々六ヶ敷事ヲ仰付られた となたヲお供申てまいろふぞ いやおもひ出した 爰ニ誰殿ト申て御酒ヲよふあがるお方が御座る 是へ参つてお供申てまいろうと存ル 主 何われお宿にこそれかし お宿にさへ御座つたらハお出なされぬと申事ハ御座るまいと存ル イヤ何かトいふ内ニ是しや 物申御案内申常ノ如ク アト イヤ表に案内が有 案内トハたそ 太 ハア私して御座り升ル アト エイ太郎冠者殿なんと思ふてお出やつた 太 たのふた者からお使にまいりました アト なんとといふお使しや 太 今日た去方ヨリ珍敷酒肴ヲもろふて御座る 何とぞお出なされて下さ

る、やうにと申こされました アト 夫ハ忝ない さりなから身共久敷お見舞も申さぬか もし門違いてハなかつたか 太 いやおまへへ参れと申付られました アト 夫ならハ幸イひまている程ニ行ふか 太 お出なされて下されませう アト 久敷お見舞も申さぬに依てお門もわする程の事しや 案内之為に先へお行きやれ 太 お案内の為に先へ参りましふ アト おりやれく太郎先へ立廻ル 太 扱く 今日ハお出なされて下されてたのふた者かさそよろこひましう アト さいせんも云通あまり御無さた申ている程によひよふに取成ヲ云てくれさしませ 太 其段ハ御氣遣なされまするな イヤ何かト申内ニ是て御座り升る アト 身共かきた通りを云てくれい 太 畏て御座る主ニモト云通り 主 さてとなたをお供申てきた 太 誰殿ヲお供申て参りました 主 アの式丁目のか 太 中く 主 つつとは是へこい さてくそちハむさとした人ヲお供申てきた あれハ大のすいきやう人で一盃のふてハ一寸ぬき 式盃のふでハ式寸ぬき 大のすいきやう人しやわいはい 太 夫ならハいなしませうト云テウデマクリシテ行 主 やい 爰迄つれて来てかへさる、物カ 身共がよいよふにあしらふてかへさふ程ニ先こふとほせ 太 イヤ御無用で御座る 主 やいそこなやつおのれが何ヲしりおつて 惣しておのれハ物にさし出てわるいとかく身共かいふやふにするやふにせい 太 さてハお前の口真似ヲ致し升か 主 いや口真似でハなけれ共 夫ほどニ心得ていれはよい こう御通りなされいといへ 太 心得ました こうお通りなされませう アト 心得たアト舞台へ出ル 主 さてく今日ハ俄ニ申



49 主／夫ハふしぎな事じや さあ早ふ着て見せい 太／おまへの御

道具て御座る程ニおまへめしませ 主／夫ならハそれ着た 太／

是ハいかな事 たのふた人が見ゆる 見へるとハ申されまいがな

んとした物て有ふ 主／太郎冠者なんと見へぬか 太／たのふた

人ハどれニ御座りますか 主／是に在るわいやい 「(補入)／

△太 おこへハ致しますれ共見へませぬ 主／是に在るわいや

い」 太／夫に御座りますか 主／なんと見へぬか 太／いかな

／そつとも見へぬで御座り升 扱／ふしぎな事しや 身共

も其見へぬ所を見たい物しやが やい／此上ハ是ヲそち二とら

する程ニ着て見せい 太／是ヲ私に下されますか 主／中／

理 太／此様ナけつこふナお宝ヲわたくしが貰ひまして何ニいたし

ませう 是ハもはやお蔵へおさめませう (米ト 云々持付) 主／やい／そ

ち二とらすれハ身共か持テいるも同し事じや くるしうない 早

米 米 夫きて見せい 太／着ますれば見へませぬが 主／さあ／早ふ

きて見せい 太／今日ハ私もいかふくたひれました 是ハも分明

日之事にいたしませう 主／笠ヲきるに草臥クワヒレが在る物か 早ふ着

て見せい 太／夫ならハ着まするぞや 主／早ふ着い 太／そりや

きました 主／夫こ、が見ゆる 太／夫見へますまい 主／夫こ、

が見ゆるハ 太／夫見へますまい 主／夫 太／それ／／ 主

／ヤイ都でぬかれてうせおつて 何の大ぢやく物 やるまいそ

／／ トツネノ通りノライマハシニゲ込

装束 シテ太郎 狂言上下 スゲ笠 一カイ入也

主 長上下

アト 長上下

(以下、次回に続く)